

小野 諒巳 提出 学位申請論文（課程博士）

『古事記』倭建命物語の研究』審査要旨

論文の内容の要旨

小野諒巳提出の論文「『古事記』倭建命物語の研究」は、『古事記』の倭建命の西征・東征を考察の対象とし、倭建命物語に独自の表現が国土平定を語るうえで果たした役割を解くという意図のもと、序論、本論全十章、結論によって構成し、『古事記』の物語展開に沿って各論を展開するものである。

序論では、西征は上巻の神話文脈に強く依拠しており、東征は孝霊記の吉備国言向や崇神記の東方十二道平定を継承するものであることを述べる。倭建命の西東征討は葦原中国平定や神武東征などに連なり、同じ国土平定を語るものでありながらも、登場人物の心情表出を主とする歌々を多く含み持つ点で、独自の抒情的物語性を獲得したものとす。また、本論文で扱う「倭建命」の名は、

ヤマトタケルノミコトとよむべきことについて論じる。

第一章「倭建命の『建荒之情』―被派遣者の資質―」では、倭建命の気質を語る「建荒之情」の表現を考察する。「建」は言向の担い手たる資質に関わる性質であり、「荒」は荒ぶる神と対峙するために必要とされた尋常ならざる力の源である。「建荒之情」は倭建命の被派遣者としての資質を語る表現であり、同時に、他者を害し損なう「荒」の性質は倭建命と倭とを引き離す力でもあったと位置づける。

第二章「出雲称揚の歌―『さみなし』の解釈から―」では、『古事記』23番歌（以下『古事記』の歌番号は「記23」の形で示す）の「さみなし」は「鏑無し」と解すべきで、「あはれ」は出雲建の佩刀自体にかかる語であることから、記23は出雲建嘲笑の歌ではなく、出雲建の刀剣讚美の歌であると論じる。記23の意義は、高天原や王権の国土掌握に関わる要地・出雲の掌握と、当地の勇士の讚美されるべき佩刀の入手を語り、倭建命が全国土平定を担う起点に立ったことを語る点にあると結論づける。

第三章「弟橘比売命入水条の表現―象徴化の方法―」では、『古事記』の弟橘比売命入水条に独自の要素（出自不記載・記24収載・陵墓造宮）を検討している。出自不記載・陵墓造宮記事は、弟橘比売命を土地の女として造形する手法として認められる。「橘」の名は、倭建命が通過したアヅマ諸国と縁を持ち、記24「さねさし相武の小野に…」を収載することで相武国とも深く結びつく。歌と発話で弟橘比売命と倭建命の愛情が語られる当該条は、〈アヅマの女〉として象徴化された弟橘比売命と倭建命の抒情的物語として東征の事績を定着させる意義を有していたと結論付ける。

第四章「酒折宮問答歌の時間意識―月立問答歌への展開―」では、記25・26を考察の対象とする。記25は、倭建命が美夜受比売を思慕する歌であり、記26は、尾張への帰着が間近であることを告げるものであると説く。美夜受比売に対する思慕を基底に据える酒折宮問答歌は、続く月立問答歌に説得性を与えるものと位置づけている。

第五章「月立問答歌の敬語表現―男女唱和の視点から―」では、倭建命と美

夜受比売との婚姻に際して歌われる記27・28を考察する。記27・28には特徴的な敬語表現（記27⇨下位者への敬語。記28⇨上位者に対する自敬表現）がある。それらは相手との親密さや愛情の表現と解され、その役割は両者の密な愛情関係を示すことにある。『古事記』は東征全体を美夜受比売と倭建命の恋物語として一貫させる。その意義は、事績の抒情的物語化を通して享受者の記憶への定着を図ることにあつたと結論付ける。

第六章「白猪神への「言挙」―「言向」から逸脱する倭建命―」では、倭建命の伊服岐能山登攀を扱っている。五十葺山の神を「大蛇」とする『日本書紀』に対し、『古事記』は白猪とする。荒ぶらない白猪神は言向の対象ではなく、それを討とうとする倭建命の行動は、荒ぶる神の「言向」を命じた天皇への背反ともいえる。この行動は、伊勢で姨に吐露した「天皇に死を願われている」という認識を強く意識した結果であつたと位置づける。

第七章「『一つ松』歌の役割―疲弊と思慕とを語る歌―」では、記29を扱っている。記29は一つ松を立派な大夫に見立て、大夫に相應しい大刀と衣を与えた

いと願う歌である。地名起源を重ねて倭建命の疲弊を描く『古事記』の構成によれば、記29は立派な松の長生不変と倭建命の満身創痍とを鮮明に対比するものといえる。また、一つ松の許に置き忘れた「御刀」と美夜受比売の許へ置いてきた「御刀」との連想から詠出されることから、記33への展開を視野に入れた歌であるとする。

第八章「思国歌にみる倭建命の忠心」では、思国歌の記31を考察する。記31中の「その子」と「髻華」の表現によれば、記31は、倭に属する人々に天皇への奉仕を命じる歌であると解し得るものである。そのような記31を含む思国歌には、倭建命の天皇に対する忠誠心が現れており、思国歌は、『古事記』の倭建命を天皇に忠実な被派遣者として描くものであると論じる。

第九章「倭建命辞世歌の役割―東征の終焉を告げる歌―」では、倭建命の辞世である記33を考察する。『古事記』の国土平定は下命と「復奏」という形式で語られるが、当該条には「復奏」がなく、倭建命の独詠（記33）と死でとじられる。記33には東征の象徴たる草那芸剣・美夜受比売と倭建命との別離が描か

れており、東征の象徴との死別を語ることで、東征の終焉を倭建命の死と重ねて印象づける役割を有していたと説いている。

第十章「倭建命葬送条」における『倭』と『天』では、「倭」の妻子による葬送の意味と、倭建命が死後に向かう「天」の意味とを考察する。倭の妻子の下向は、倭建命の魂を慰撫するものであり、同時に、「倭」を名に負いながらも倭との関係が希薄に見える倭建命と「倭」とを繋ぐ役割を有する。倭建命が平定してきた熊曾・出雲・アヅマ・ヒムカシという国土平定の各領域を包括する倭の先にあるものが、倭建命の飛翔した「天」である。「天」は高天原と同義であり、倭建命葬送条は、神代から続く国土平定の終了を語る役割を有すると考える。

本論文では以上各論の結論を通して、全国土平定の事業を「倭建命」という一人物に集約して語る意図により、倭建命物語が編まれたと説いている。倭建命物語は、東征の全体が美夜受比売や弟橘比売命、倭の後等・御子等と倭建命との愛情描写によって包括され、全てが抒情的表現を通して倭建命に集約される。このように抒情的物語として描かれた倭建命物語は、『古事記』序文に記さ

れる「後葉に流」えることを企図して描かれたものであり、それは国土平定の歴史叙述の、享受者への定着を意図した方法によって描かれたものであったと結論付ける。

論文審査の結果の要旨

小野諒巳提出論文「『古事記』倭建命物語の研究」は、『古事記』中巻景行天皇条に記載された倭建命の西征・東征説話の叙述の方法とその意図・意義について論じたものである。全十章よりなるが、基本的に『古事記』の物語展開の順に従って並べられている。『古事記』の倭建命物語は多く歌を伴うという特徴があるため、本論文も歌の解釈を中心に論じたものが全十章中八章に及ぶ。総じて、歌によって倭建命と、倭建命をとりまく女性の心情描出が描かれるところに『古事記』の叙述の特徴があり、本論文もそこに着目して論を展開させている。

第一章においては、物語の発端に当たる兄殺しのエピソードを取り扱う。小

確命（倭建命）は兄殺しによって父景行天皇からその「建」「荒」の性質を恐れられ、西東の征討へと派遣されることになるが、父によって見いだされた「建」は天皇となるための資質を有している。一方「荒」は荒ぶる神と対峙するための尋常ならざる力の源であるが、しかしそれは王権には受け入れられない性質でもあったが故に、倭建命は天皇として即位することなく滅びざるを得なかったと論じる。倭建命の二つの資質である「建」「荒」は、共に備えていなければ国土平定が果たし得ないものであるが、しかしそれは同時に自らを滅ぼすものであるという、倭建命の宿命を決定づける要因であったというその解釈には頷けるものがある。

第二章は出雲建討伐について、その意味するところを「やつめさす出雲建が佩ける大刀……」の歌の解釈を中心にして論じている。従来、歌の解釈が、倭建命の出雲建への嘲笑であるか同情であるか、または刀剣讚美の歌であるか否かが問題となってきた歌であるが、本論ではこれを刀剣讚美の歌と解し、物語の意義を出雲讚美にあるとした。神話から続く出雲の物語の結末として位置づけ

るのである。西征説話にはここにしか歌が記載されていないために、本論文で西征を扱ったのもこの第二章のみとなっているが、抒情に特化されて描かれた倭建命物語を論じるものとして本論はやや視点が異なるように読める。西征における倭建命の心情という視点から、本論文全体の主旨に即して西征を論じる余地は多分に残されているように思われる。

第三章は、倭建命東征の対象として大きな位置を占めるアヅマの征討を描く際の要として弟橘比売を位置づけ、〈ヘアヅマの女〉である弟橘比売と倭建命との抒情的物語として東征の事績を定着させる意義を有していたと説く。この見解は次の美夜受比売との関係においても同様に論じられる。

第四章・第五章・第七章では、それぞれに尾張の美夜受比売の存在と東征の物語との関係を中心に歌と散文、特に歌表現の考察をしている。中でも第四章においては、甲斐の酒折宮における御火焼老人との歌問答を、『万葉集』に見る旅の歌の表現の分析を元に、美夜受比売への思慕の情を示すものと捉えている。その解釈は従来には見られなかったものであり、新見に富んでいる。五・七・九

章も含めて、倭建命の東征が、美夜受比売との愛情物語を軸に据えて描かれているという捉え方は、本論全体の結論と大きく関わる場所である。

第六章・第八章においては、倭建命の父天皇への思いを中心に、歌と散文の表現の考察を行う。これも本論文の特徴として挙げられるのは、倭建命を、父天皇の詔に忠実な被派遣者として捉える点にある。倭建命は東征を終えて後に伊服岐能山の神を素手で取りに行き、その神への敗北をきっかけとして死に向かうことになるが、その行動は自らの死を望む父天皇の意向を意識した結果であると論じる。伊服岐能山の神討伐は父天皇の詔を逸脱する行為であるが、しかしそれは父の意志に忠実であろうとする倭建命が選択した行為であったと説く。死の直前に詠んだ思国歌にも父天皇への忠誠の心が表されていると見る。

第九章では倭建命の辞世の歌について論じている。この歌は直接的には尾張の美夜受比売にその意識が向いている。倭建命終焉の場面においては、美夜受比売への思い、父天皇への思い、そして倭の後・御子への思いが複雑に絡み合っているように読めるし、本論文においてもそのように理解しているものと思わ

れるが、亡くなる直前に詠んだ歌が何故尾張を歌う歌であったのか。東征を象徴する草那芸剣と美夜受比売への別離を歌うことで東征の終焉を印象付けるといふのは頷けるところではあるが、交錯するヤマトへの思いの問題と絡めて、まだ検討の余地はありそうである。

第十章は本論文が考察してきた倭建命物語全体の意義を取り纏めた論となっている。以下、第十章の内容も踏まえつつ、本論文全体について述べる。本論文では倭建命の西征・東征を上巻の神話世界との繋がりを重視して説く。特に葦原中国平定から神武東征等を経て、国内最後の国土平定を描く一連の話は、『古事記』における国土平定の完成を意図するものとしての意義を担っていると説く。倭建命が最終的に天^ニ高天原へと飛翔するという結末は、天神の命によって始まった天下平定の終了を意味するものであり、本論においては明示されていないが、父天皇に対しては果たされなかった「覆奏」は高天原への回帰によって天神に対してなされるという捉え方も可能となる。

また、特に東征においては、倭建命と女性達との関わりを、歌による登場人

物達の心情描出を中心に描き出すが、アヅマと弟橘比売、ヒムカシと美夜受比売、ヤマトと后達（伊勢と倭比売も加えられようか）というように、それぞれの空間において対象となる女性が存在し、そして情を交わし合いながら話を展開させていくその方法は、抒情に特化された描き方であり、独自の抒情的物語性を獲得していると評価する。こうした抒情化の意図は、享受者の記憶への定着をはかることにあり、それが『古事記』序文に言うところの「後葉に流へ」るための方法であったというのが一貫した主張となっている。

このように本論において主張されている事柄には一貫性があり、論じている内容も全体としては筋が通っており、破綻はない。しかしながら、使用されている用語、説かれている内容にはやや意義が不明瞭なものや、十分に検討がなされたとは言いがたい面があることは否めない。特に、「抒情的物語化による享受者への定着」といった内容について論じる際に、何故「抒情的物語化」が成し得たのか、その基盤にあるものは何かが問われなければならない。『古事記』以前にその萌芽があるのか、担い手はどのような存在であったのか、歌の問題も

含めて発想基盤・発生基盤が問題となるであろうし、『古事記』編者がどう関与したのかという問題も残る。「享受者への定着」についても、それが果たされたのか否か、その痕跡があるのか否かが提示される必要もあろう。そうした『古事記』以前から『古事記』に至る過程と、『古事記』以後の文学史的展開とを視野に入れて考察して行く必要がある。本論文では「物語」という言葉を使宜的に、「ある筋道を持った散文」を指すものとしているが、「物語」の定義も含めて、倭建命の西征・東征を「物語」として把握することの意義を今後は更に考察して行く必要はあろうし、それが『古事記』全体の問題にどう繋がっていくのかも問われるところであろう。

以上、本論文は荒削りの部分も多々見られ、細部に検証すべき問題も残されてはいるものの、『古事記』の倭建命の散文と歌による叙述の意義を統一的に捉え、従来の説を越えようと果敢に論じられた力作であると言える。よって本論文の提出者小野諒巳は、博士（文学）の学位を授与せられる資格があるものと認める。

平成二十九年十二月十二日

主查	國學院大學准教授	谷口雅博	印
副查	國學院大學准教授	土佐秀里	印
副查	立命館大學教授	藤原享和	印
副查	聖學院大學教授	渡辺正人	印

小野 諒巳 学力確認の結果の要旨

左記四名が各専門分野からそれぞれ学力確認の試験を行った結果、博士(文学)の学位を授与される学力があることを確認した。

平成二十九年十二月十二日

学力確認担当者

主 査	國學院大學准教授	谷 口 雅 博	印
副 査	國學院大學准教授	土 佐 秀 里	印
副 査	立命館大學教授	藤 原 享 和	印
副 査	聖學院大學教授	渡 辺 正 人	印